

平成17年11月27日(日)午後2時より、市民会館にて「宮城県のこれからのお産を考える」と題して、公開フォーラムを開催した。ポスター(資料1)を作成し、県内の日本産科婦人科学会員と、幼稚園ならびに保育所に郵送にて配布したほか、インターネット上にホームページを開設するなどして広報に努め、参加者を募った。昨年度と同様に参加費は無料とし、今回は参加者の便宜を図り事前申込みは不要とした。

当日は第一部として、7名の講師により産科医療の現状と対策について、行政を含めた様々な角度からの意見交換を行い、続く第二部において、仙台地区における今後の周産期医療システムの方向性について討論した。

#### ②参加者に対するアンケート調査の実施。

公開市民フォーラムの参加者に対し、受付にてアンケート調査票(資料2)を配布した。必要に応じて筆記用具と下敷きも貸与し、記入の便宜を図った。会終了後、出口にて調査票を回収した。

### C. 研究結果

#### ①市民公開フォーラムの概要(資料3)

第一部では、7人の講師が、各々の立場から周産期医療の現状と今後の方向性について講演した。

まず、総論として、麻酔科医や小児科、新生児専門医、助産師を含んだ周産期医療スタッフが不足しており、中でも産婦人科医の減少は、東北地方では全国レベルよりも著しく、分娩を取り扱う病院が減っていることが示された。

次に北海道では、過重労働を強いられがちな勤務医が、札幌市内で開業するパ

ターンが多く見られ、すでに集約化もできない状況に陥っていることが指摘され、在道3医育大学が行政とともに協力して状況改善に向けて努力している現状が示された。

続いて、妊婦健診の内容を標準化し、健診は健診施設で、分娩は分娩施設で行うという、仙台地区において始まったセミオープン化システム(仙台システム)について説明がなされた。

次に、広い面積と山間部が多い地形の壁のために、隣県岩手県で早くから実践されている周産期医療への遠隔診療システムに関して、その具体的な活用方法と評価が紹介された。

その後、休憩をはさみ、産婦人科医不足の中で、分娩を取り扱う職能集団である助産師による助産師外来や院内助産院という新たな形の機能分担・役割の拡充について、その方向性が示された。

続いてその具体的な一例として、公立刈田総合病院における病院勤務助産師による院内助産所の取り組みが紹介された。最後に、行政の立場から、医師全体の数が2.8%増加する中で産婦人科医は2%減少している現状を踏まえて、行政が行おうとしていること、すなわち診療科間の医師数の偏重の是正や増加する女性医師の労働力有効活用のための規制の改廃、診療報酬など労働対価の見直しなどについて、方向性が述べられた。

第二部の自由討論においては、まず、仙台のセミオープンシステムが稼働していく中で、どこで分娩できるのかというような情報を消費者でも自由に収集できるようなシステム作りの必要性が指摘された。次に、助産所での分娩管理に関

して、正常症例を厳選することで、緊急事態は極力回避できることのほか、より良いコミュニケーション環境作りが医療訴訟をも回避するとの意見が述べられた。最後に、産婦人科の医師を増やすためには、診療上の経済的援助のみならず労働対価の適切な配分が必要であるということが論じられ、国が進める国立病院の独立行政法人化、県立病院の地方公営企業法の全面適応は、各病院が給与等の改正を柔軟に対応することを可能とするための下地作りの制度改革であることが指摘された。その他には、妊娠から分娩まで一貫して診てもらおうという選択肢をなくさないで欲しいという市民からの要望の声も聞かれた。

以上に見るような、さまざまな議論の末、最終的に、この問題は一つの方法ですべてが解決することは考えられず、今後はさらに多くの意見を取り入れて解決に向けて努力していくことが確認されて、会は終了した。

## ②参加者に対するアンケート調査結果

公開市民フォーラムの参加者は102名、回収されたアンケート調査票は81枚であり、回収率は79.4%であった。質問に対する結果の集計は、有効回答数を分母として、その回答の占める割合を算出して評価した。

地元の新聞がこの催しを記事として掲載してくれたりもしたが、このフォーラムの開催を知ったのは、ポスターによるとの回答が約4割を占め(図1)、ポスター配布の効果が窺われた。参加した理由では、自身あるいは家族の出産が参加の動機であったのは1割にも満たず、仕事の関係が8割を占めた(図2)。その結果

を反映してか、産科医が減少していること、分娩できる病院が減ってきていることは9割以上の参加者がすでに把握していた(図3,4)。こうした産科医療の不足の責任の所在は、医療行政にあると考える者が9割を占め、大学医局にあるとする者は4割にとどまった(図5)。次に、出産に対して何を望むかを、回答の選択をひとつに限りて尋ねたところ、4分の3は安全性を選択し、利便性を選んだ者はいなかったが、2割弱の者が快適性を求めている(図6)。

続いて、講演内容に関する設問では、8割が難しくなかったと答え(図7)、9割近くが問題点を理解できたと回答していた(図8)。時間配分についても2割弱が講演時間の長さを指摘したが、丁度良いとの回答が8割を占め(図9)、また全体として、9割が参加して良かったと答えていた(図10)。

最後に、本会で示された今後の周産期医療の方向性について、まず、仙台システムは、よいと回答した者が44%いたのに対し、悪いは10%、わからないと答えた者が42%存在した(図11)。また、もし当事者であれば仙台システムを利用するかという問いには、利用するが36%、わからないが39%と減少したのに対し、24%が利用しないという回答であった(図12)。一方、院内助産院の場合は、よいシステムであると回答した者が74%、わからないが25%であったのに対し、悪いという回答は1%に過ぎず(図13)、また、当事者なら利用すると答えた者は58%、わからないが28%で、利用しないと回答した者は12%という結果であった(図14)。

#### D. 考察

市民フォーラムを開催する以上、多数の市民の参加を期待するのが当然であるが、今回の参加者の多くは、周産期医療の関係者であった。テレビや新聞などの各種マスコミが、産婦人科医の減少と病院での分娩取扱いの中止を、ようやく真摯に報道する取り組みを始めたことから、周産期医療の現状の世間への周知は進んできているように見える。しかしながら、妊娠・出産というイベントは、すでに平均的な女性の一生の中で一度か二度の体験であることから、周産期医療崩壊の危機的状況を当事者の問題として捉えている一般人は実はそう多くはないのであろう。ましてや、仙台地区は郡部と異なり病院や診療所の数も多く、医療者側の事情はともかく、市民感情としては危機感が希薄であろうと想像される。

また、今回事前に行った、県内の保育所や幼稚園へのポスターの配布は、それなりに効果を上げたと思われるが、さらに一般市民の参加を募るには、テレビや新聞による早い時期からの広報と、あるいは集会時に託児所を併設するような工夫が必要なのかも知れない。そのほか、日曜日の午後という時間帯の設定も一般市民の参加に適切かどうかとも検討する必要があるかも知れないけれども、少なくとも今回のフォーラムの内容と時間に関しては、難しすぎたとか長すぎたという意見は予想より少なく、参加者にとっては概ね満足できる集会であったと考えられる。

ところで、通院に便利な近くの場所で安価に心地よく安全な出産をするのが分娩の究極の理想像だとしても、現状では

すべてを満たすことは不可能である。そこで、出産に対して何を望むかを、回答の選択をひとつに限り尋ねたところ、2割弱の者が、安全性よりも快適性を選んでいった。専門家にとって、分娩は決して安全とは言えず、いつ何時母児の生命に関わる緊急事態が突発するとも限らないことは、周知の事実である。それにもかかわらず、2割弱の者が快適性を重んじるのは、分娩は安全であるという「神話」が潜在意識に存在するからであろう。周産期医療関係者の参加が多いにもかかわらず、このような結果が得られたことは、極めて重要な意味を持つと思われる。世間一般に対しても、より一層分娩についての正しい知識を広めることの重要性を示唆する結果と考えられる。

ところで、仙台におけるセミオープン化はすでに稼働を開始しているが、院内助産院は県内で一カ所、刈田総合病院で始まったばかりである。それにもかかわらず、仙台システムをよいと判断し、当事者であれば利用したいと考える者は過半数に満たなかったのに比べて、院内助産院の評価、および利用する可能性は、高いという結果を得た。これは、医師以外に分娩を扱うことのできる助産師に対する期待の現れと捉えることができよう。すなわち、多くの方は、産婦人科医の減少が引き起こした諸問題を、助産師の力で解決してくれることを願い、希望しているものと推察される。現実に院内助産院を広めるためには周到な準備と環境整備が必要であると思われるが、今後の助産師パワーに期待したい。

さて、以上のように見てくると、医療者側と医療の受け手の間には、確実に理

解のずれ、意識のずれが存在する。このずれを埋めるためには、情報の公開と、お互いを理解するための話し合いを繰り返す必要がある。周産期医療の改革は今後も急速に進めざるを得ない状況にある。この問題を多くの人の目に晒すことが、問題意識を育て、世論の形成につながると考えられることから、今後も引き続き年一回程度のフォーラムを開催し、多くの意見を汲み上げることが、必要であると考えられる。

#### E. 結論

いかに周産期医療が崩壊の危機にあろうとも、すべての市民が周産期医療に関心があるわけではなく、またそれを世間に知らしめる機会も少ないのが現状である。そういった意味から、医療の担い手のみならず受け手をも交えた検討の機会を設けることは今後も繰り返されて良い。地域における周産期医療の適正化を今後さらに進めていくためには、産婦人科の医師や助産師、国、県、市町村すべての行政者のほか、市民、県民を交えて方向性を見出していく必要がある。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況（予定含）

なし

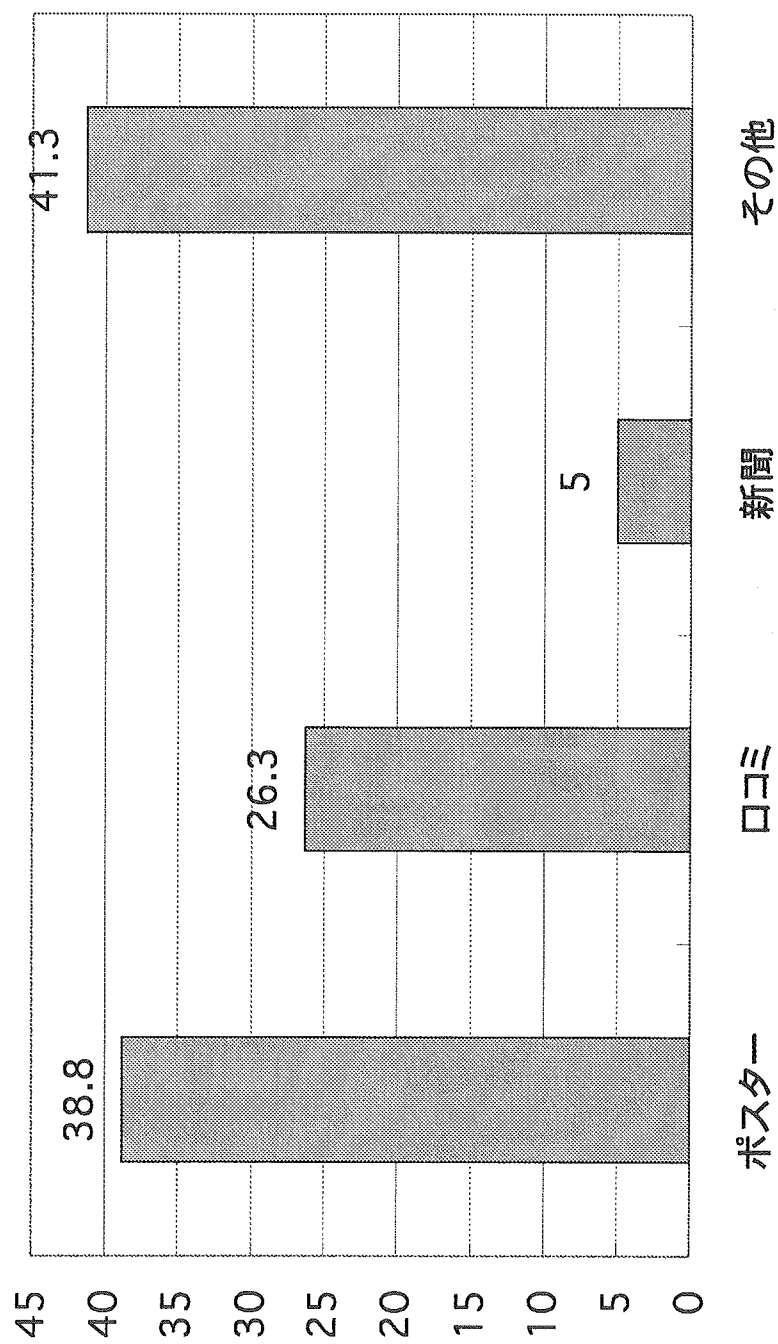


図1. 何で知りましたか

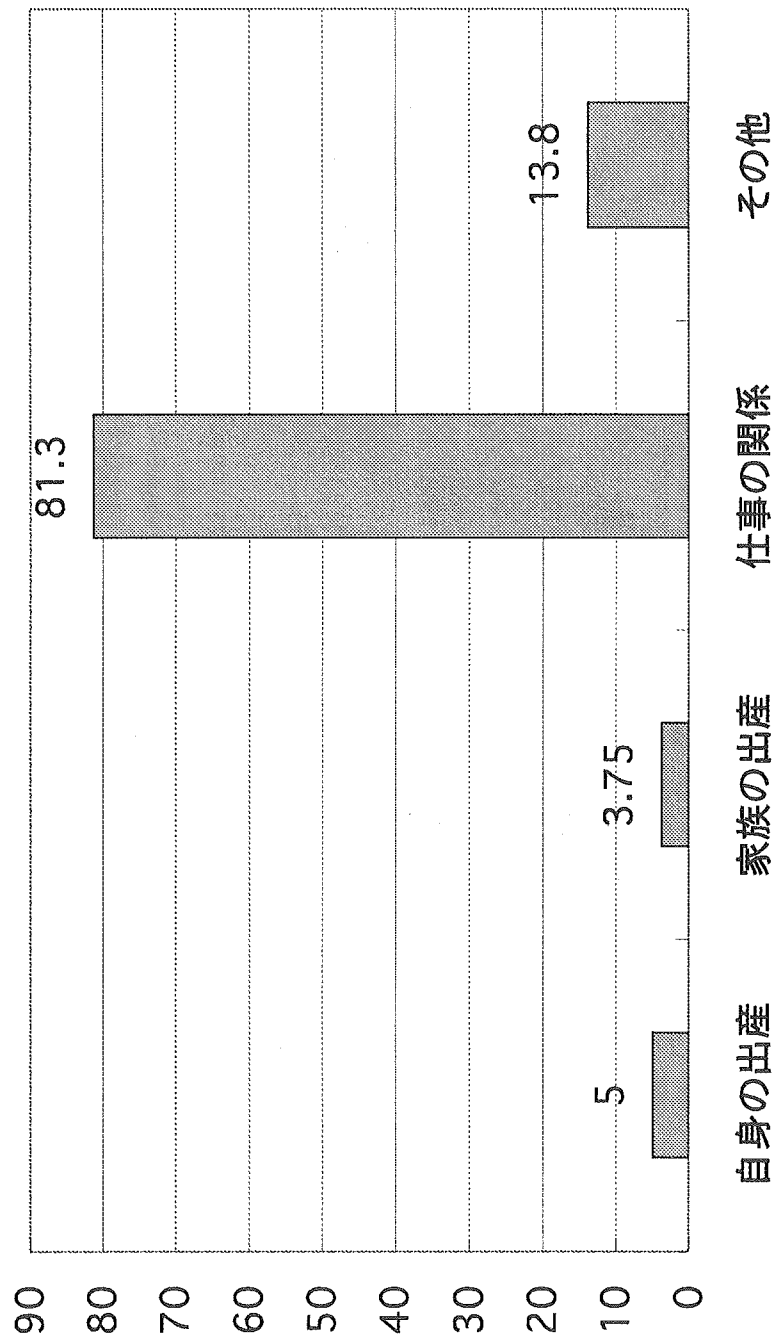


図2. 参加した理由は何ですか

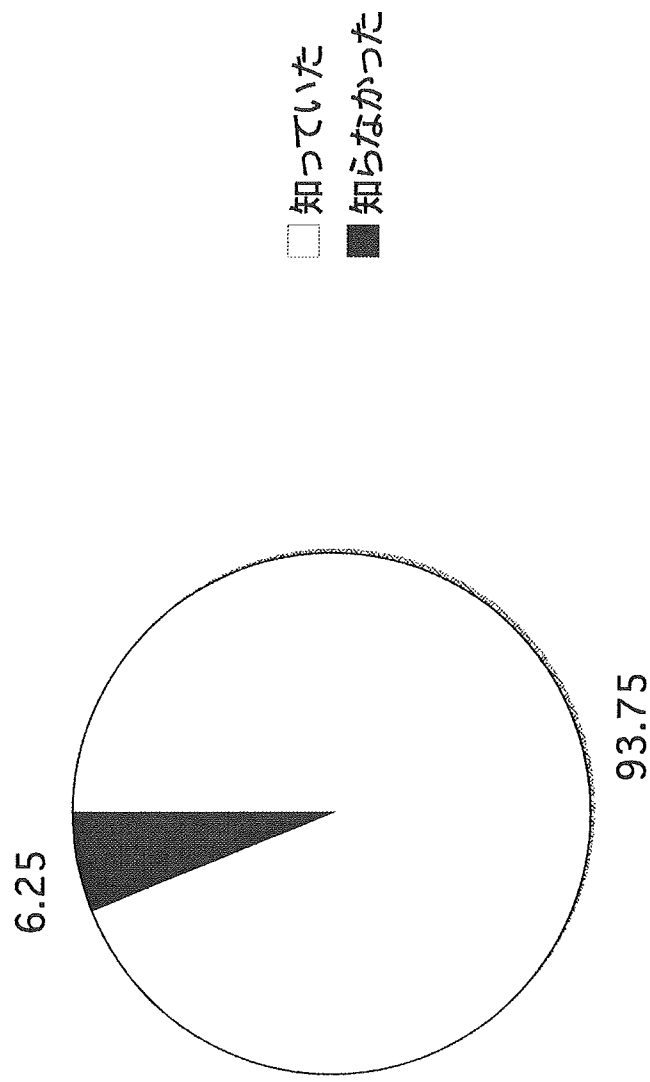


図3. 産科医が減っているのを知っていたか

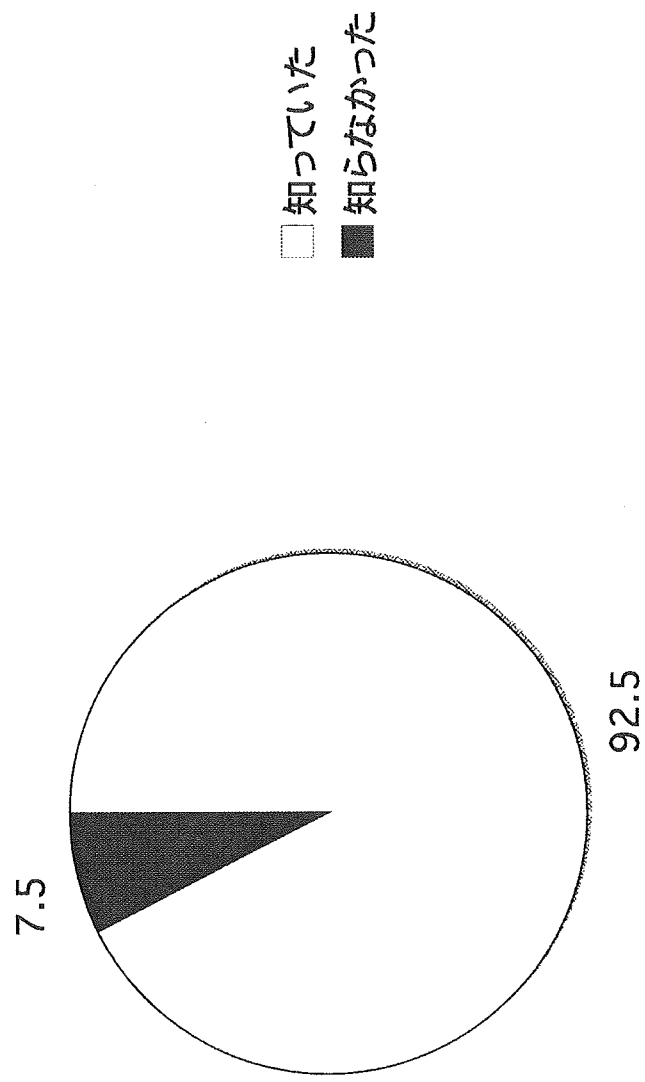


図4. 出産ができる場所が減っている  
のを知っていたか



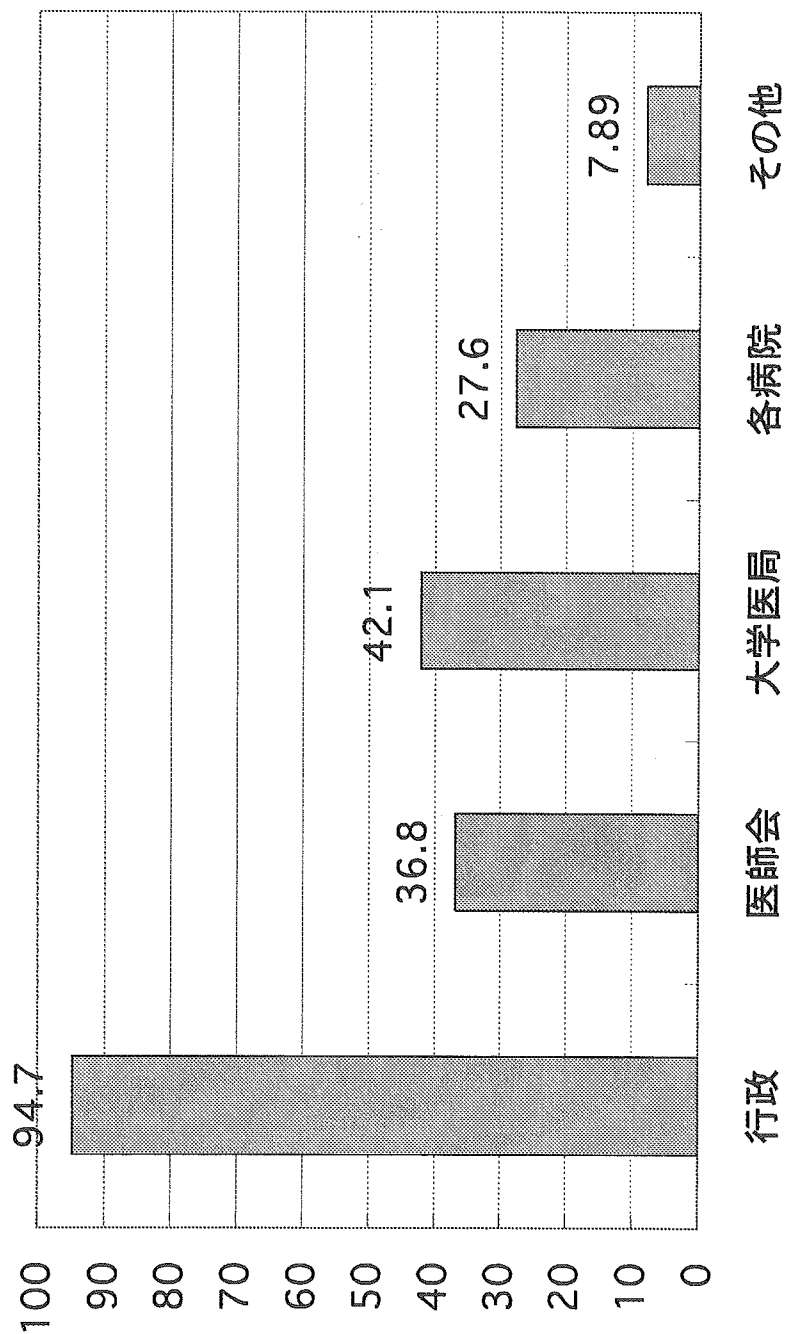


図5. 地域の産科医療の責任を担うのは

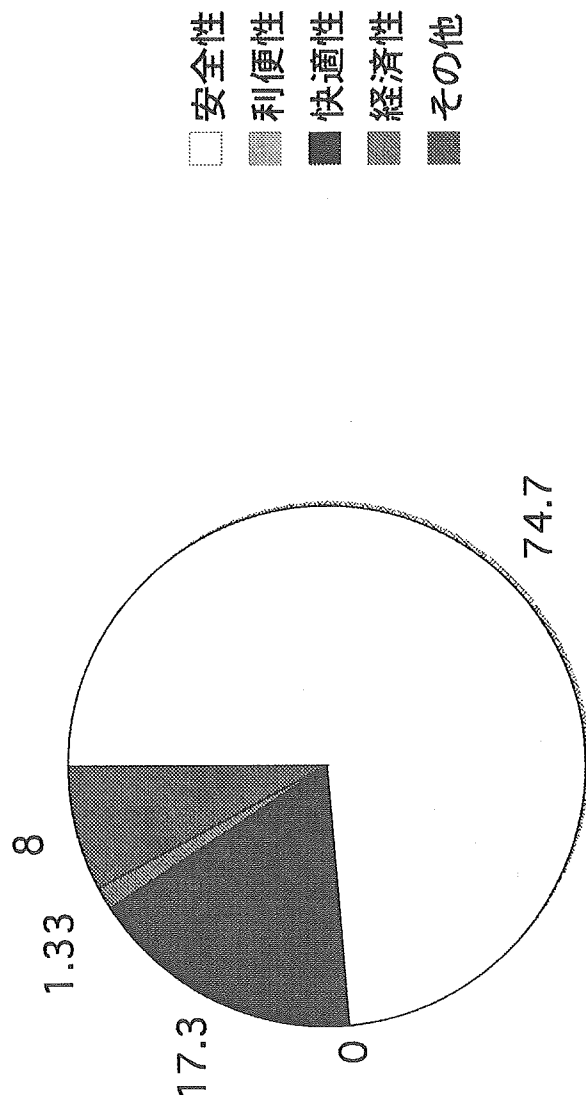


図6. 出産に何を望みますか

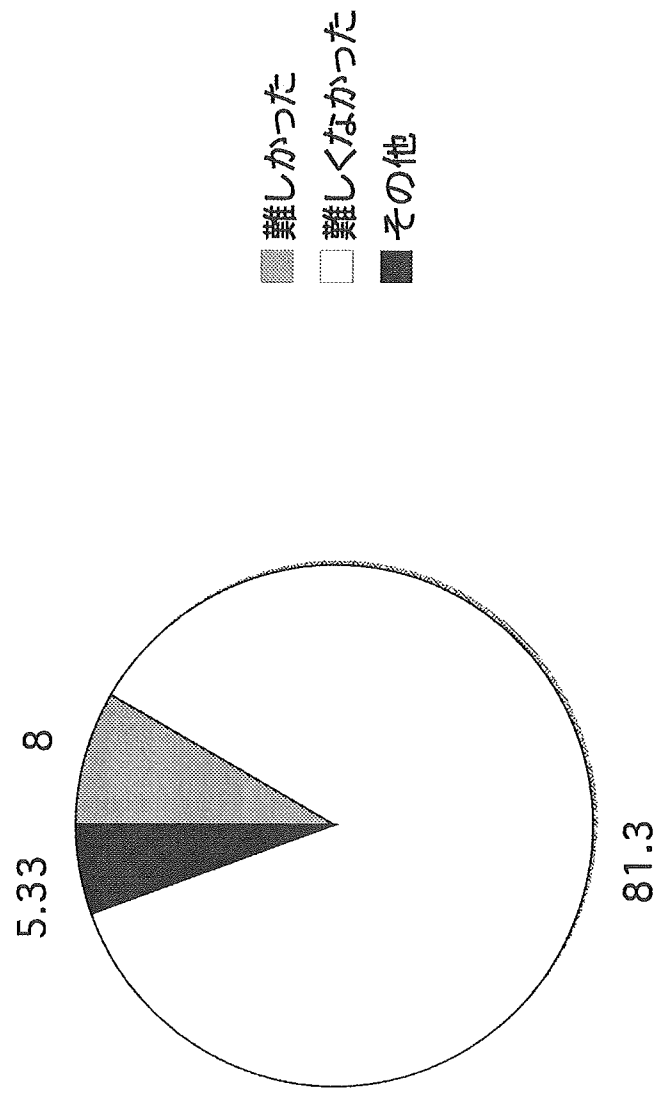


図7. 講演内容はどうか

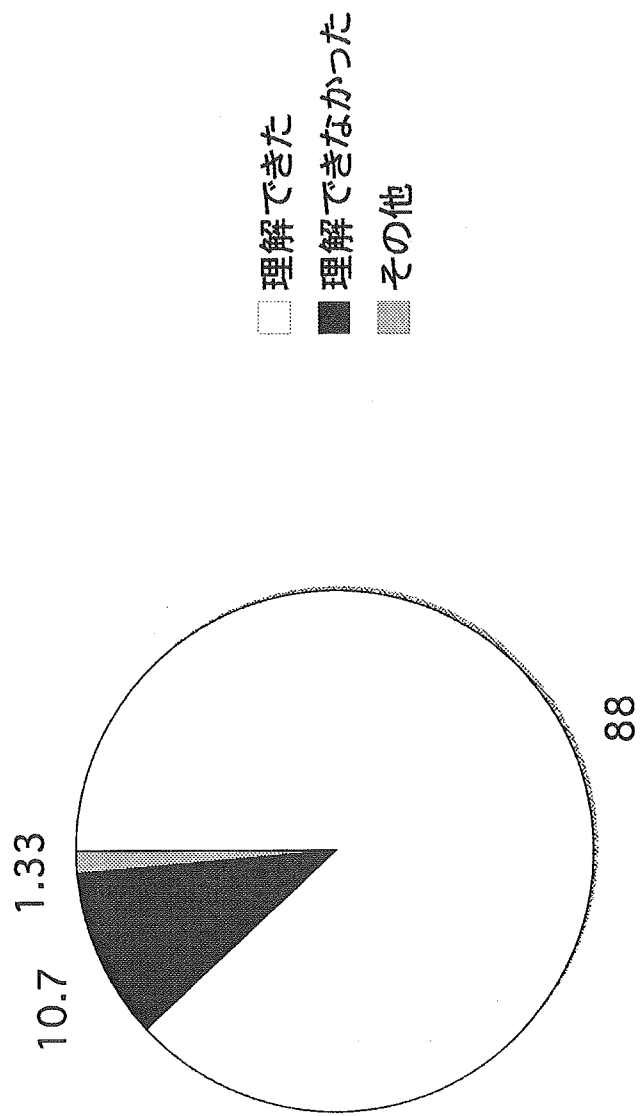


図8. 問題点を理解できましたか

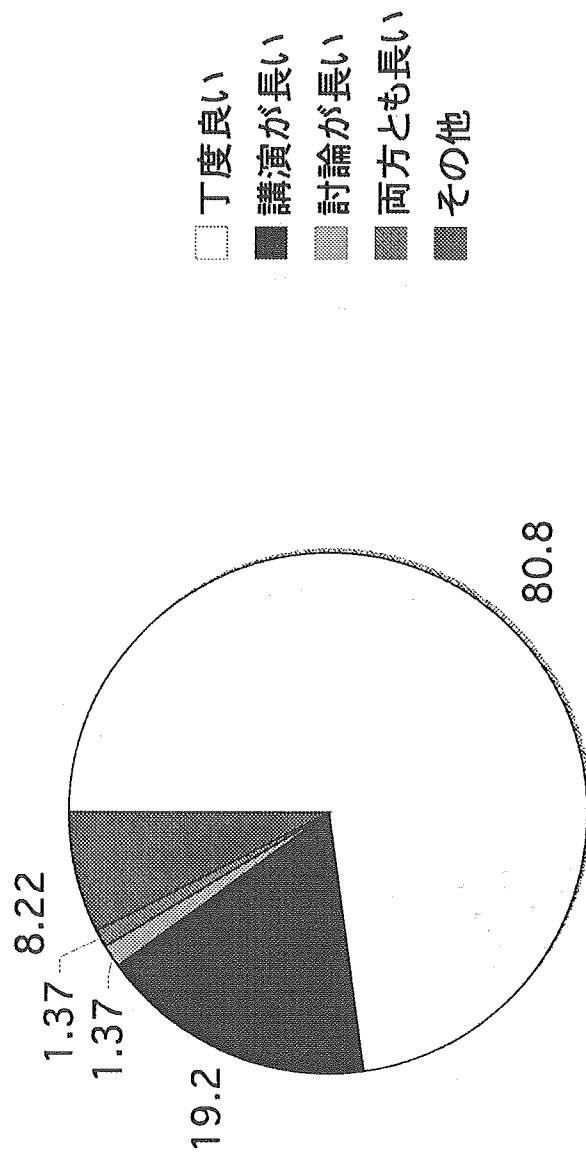


図9. 時間配分はどうか

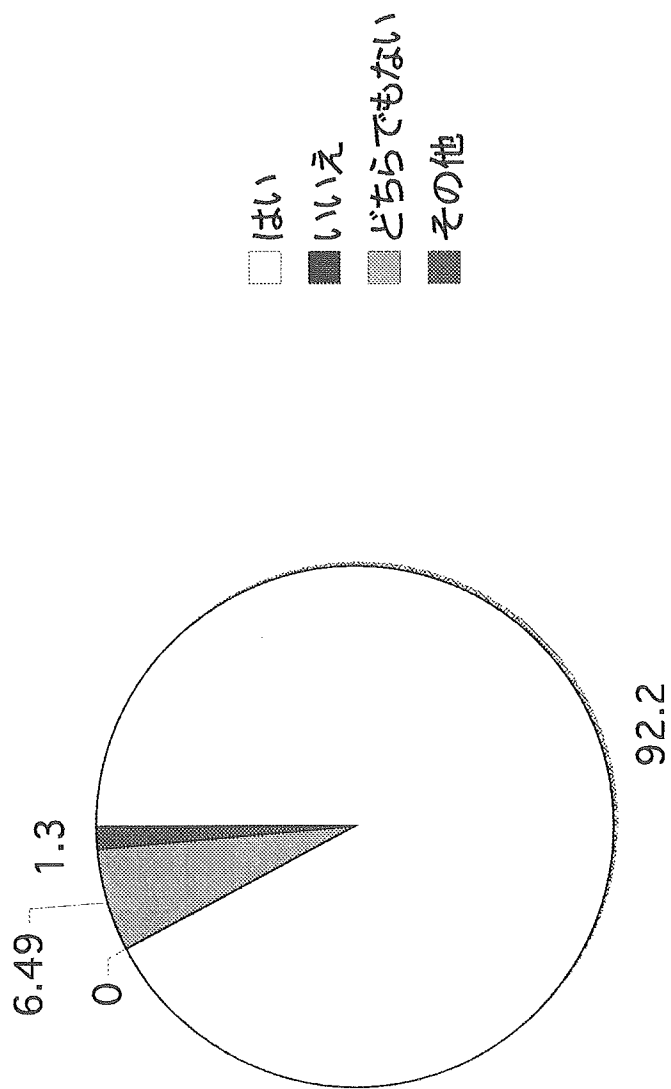


図10. 参加して良かったですか

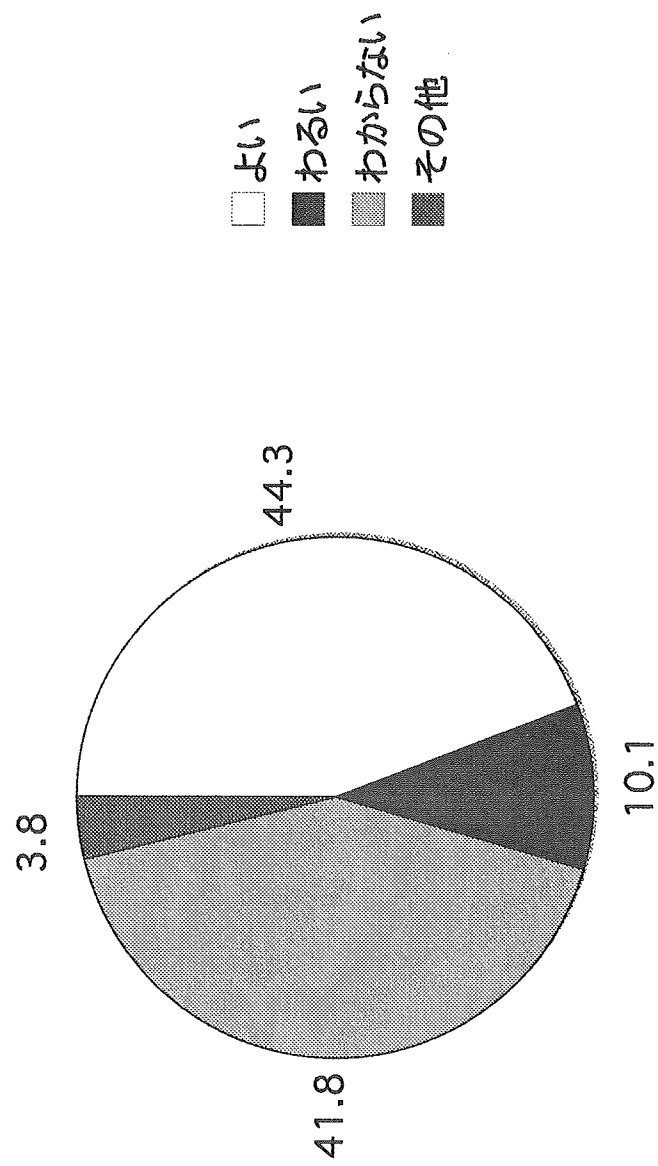


図17. 仙台システムをどう思いますか

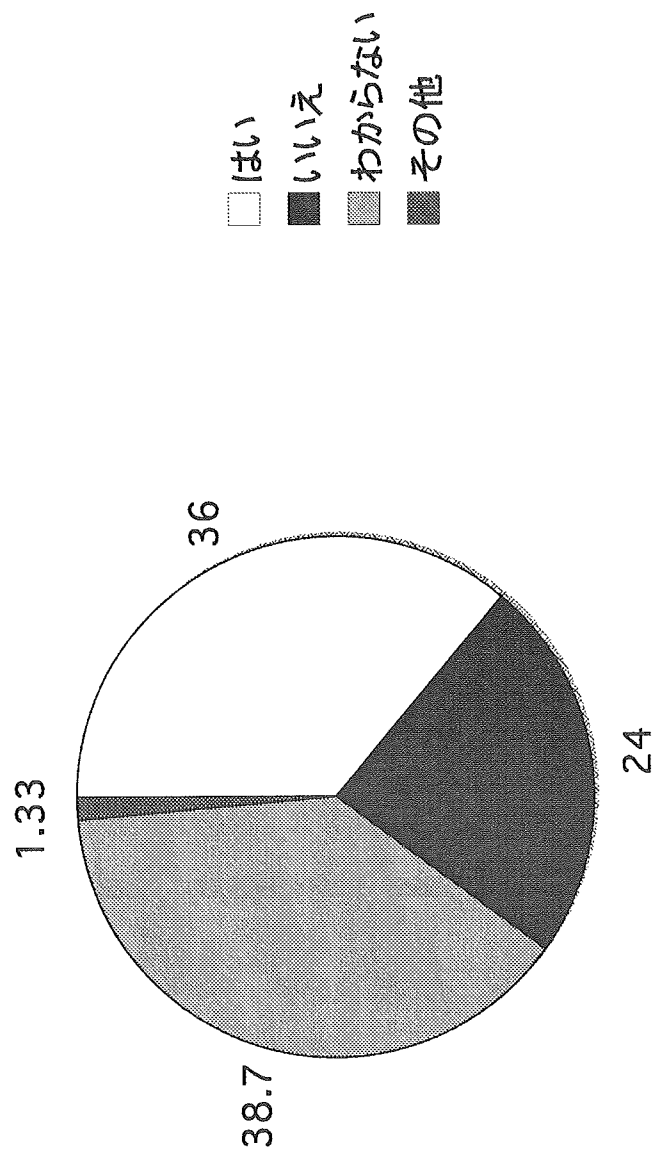


図1 2. 仙台システムを利用しますか



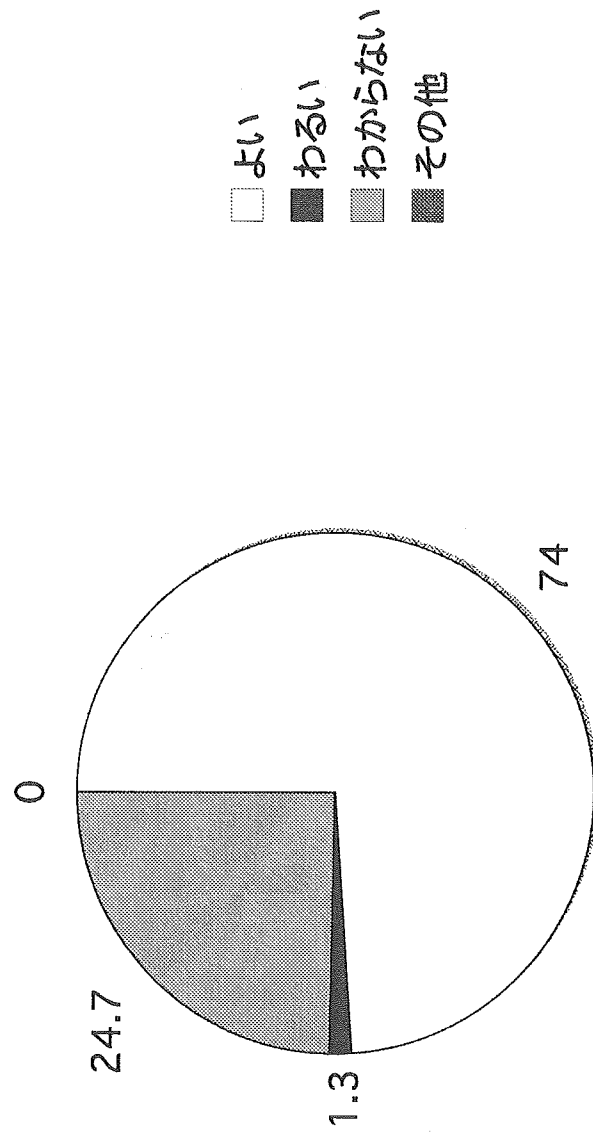


図13. 院内助産院をどう思いますか

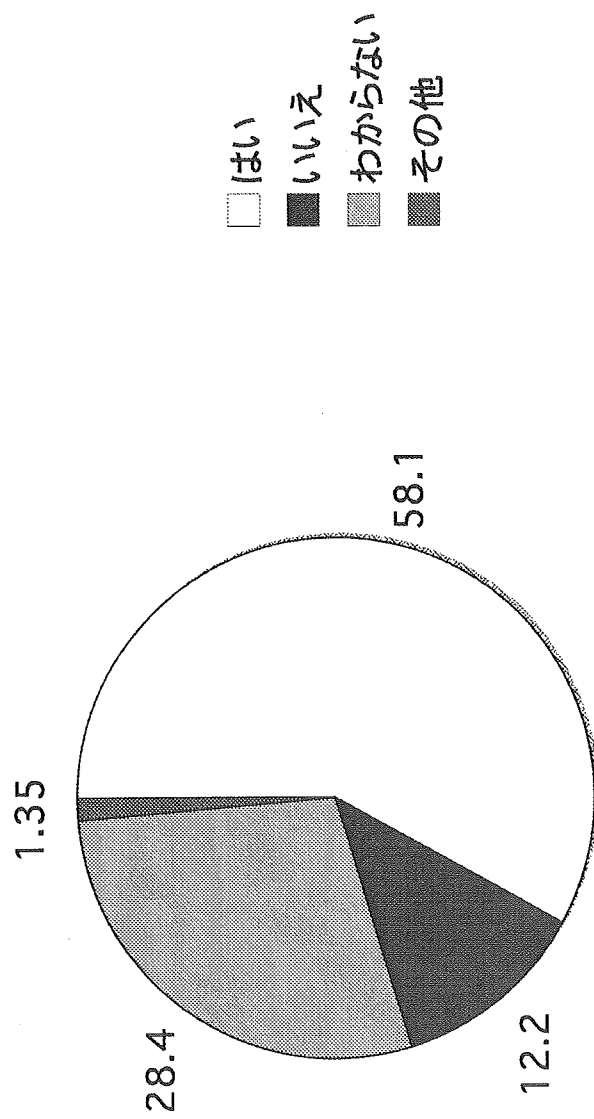


図14. 院内助産院を利用しますか

公開市民フォーラム

# 宮城県のこれからの お産を考える

平成17年11月27日(日) 14:00～17:00

会場：市民会館小ホール

参加費：無料

お母さんや赤ちゃんの  
一大事も大丈夫？

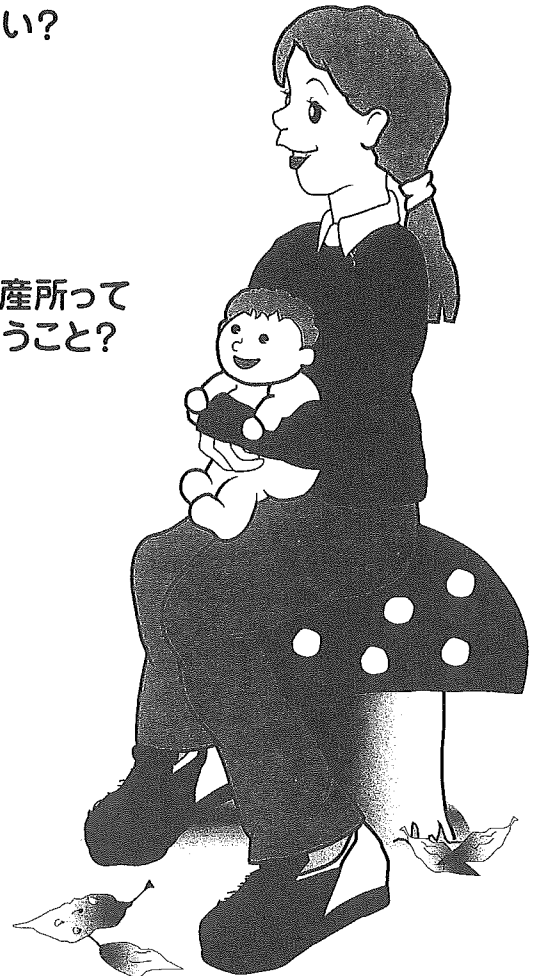
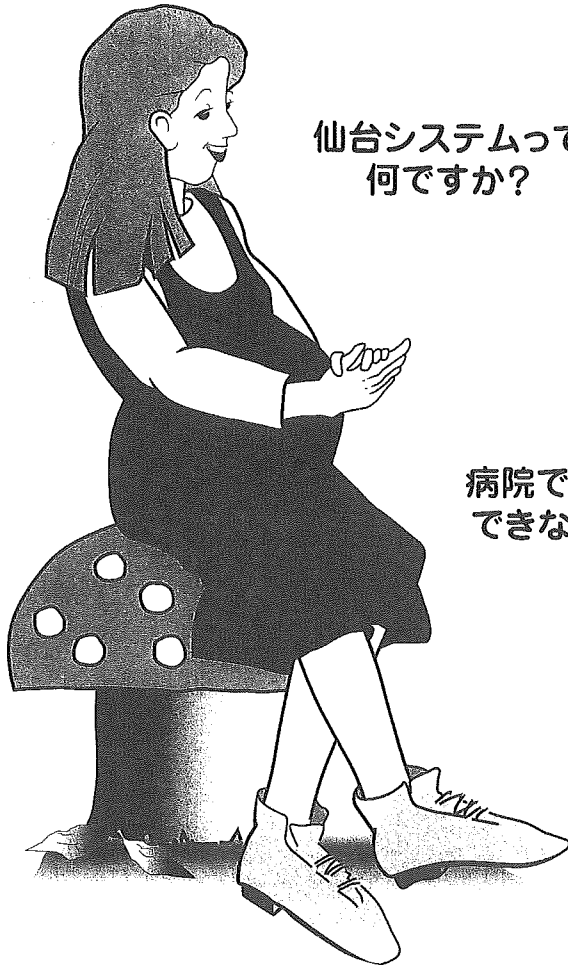
産科のお医者さんは  
減ってるの？

病院から遠くても  
心配ない？

仙台システムって  
何ですか？

院内助産所って  
どういうこと？

病院でお産は  
できないの？



主催／厚生労働省科学研究「地域における分娩施設の適正化に関する研究」  
後援／日本産婦人科医会宮城県支部 仙台産婦人科医会 日本助産師会宮城県支部  
お問い合わせ／東北大学産婦人科教室 FAX 022-717-7258

● 詳細につきましては下記ホームページをご覧ください。

<http://www.ob-gy.med.tohoku.ac.jp/index.html>

## 〈公開市民フォーラム アンケート〉

下記のご質問につき、a, b, cなどの記号を○で囲んでお答え下さい。該当する場合には{ }内も○でお選び下さい。また、( )内には適宜ご記入をお願いします。

1. この公開市民フォーラムを何でお知りになりましたか。
  - a. ポスターをみて
  - b. 口コミで
  - c. 新聞をみて
  - d. その他 ( )
2. このフォーラムに参加した理由は何ですか。(複数回答可)
  - a. ご自身がこれから出産を考えているため →次のお子様は( )人目
  - b. 自分以外のご家族が出産を考えているため
  - c. 仕事の関係 →右よりお選び下さい {産科関係者・それ以外の医療関係者・その他}
  - d. その他 ( )
3. 産科の医師が減っているのをご存じでしたか。
  - a. 知っていた → {テレビを見て・新聞をみて・その他 ( )}
  - b. 知らなかった
4. 出産ができる場所が減っているのをご存じでしたか。
  - a. 知っていた → {テレビを見て・新聞をみて・その他 ( )}
  - b. 知らなかった
5. 地域の産科診療を充足させる責任はどこにあると思いますか。(複数回答可)
  - a. 国・県・市などの行政
  - b. 県や市の医師会
  - c. 大学病院 (医局)
  - d. 各病院設立者
  - e. その他 ( )
6. 出産には何を望みますか。ひとつだけお選び下さい。
  - a. 安全性
  - b. 利便性
  - c. 快適性
  - d. 経済性
  - e. その他 ( )
7. 今回の市民フォーラムについて
  - 1) 講演内容はいかがでしたか。
    - a. 難しかった
    - b. 難しくはなかった
    - c. その他 ( )
  - 2) 問題点を理解できましたか。
    - a. 理解できた
    - b. 理解できなかった
    - c. その他 ( )
  - 3) 時間配分はいかがでしたか。
    - a. 丁度良い
    - b. 講演時間が長すぎる
    - c. 討論時間が長すぎる
    - d. 講演、討論とも長すぎる
    - e. その他 ( )
  - 4) 参加して良かったですか。
    - a. はい
    - b. いいえ
    - c. どちらでもない
    - d. その他 ( )

→ (裏面に続く)